

色は匂へど

IRO

WA

NIO

E

DO



特集 吉岡幸雄日本の伝統色を語る

平成九年水無月一日発行

巻参



PHOTO SHU FUJIWARA

今年はヘルボップ彗星が美しく天空を飾りました。

日本の夏の二大行事は七夕とお盆です。

七夕は星に願いをかけ、未来に夢をつなぎます。

お盆はさきだつた両親、祖父母、あるいは子どもたちが

迎え火に導かれて、帰ってきます。

それぞれの家のご先祖様たちも帰ってきます。

そして今遠くへ住んでる子どもたちも家族を連れて帰ってきます。

七夕とお盆にあるもの。

それは祈りです。

お仏壇に手を合わせ、見えない大きな世界にある心と命の故郷を再確認します。

その祈りが未来を生きる大きな糧になります。

満天の星々に未来を祈るのも、私たちと宇宙とのつながりを感じていればこそです。

お盆に日本中の人々が故郷をめざすのは生まれきた故郷と星々に導かれる未来を心の中のどこかに感じているからです。

日本の心と形

七夕 星に願いを



3

新連載開始



5

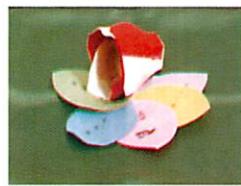
飯島太千雄

書聖空海の魅力

7

特集

吉岡幸雄日本の
伝統色を語る



16

弘法大師の詩

写経の古寺巡礼
新刊紹介



写経の古寺巡礼
豪跡寺・大覚寺・唐招提寺……
写経の名刹から、中尊寺・祇島
神社……名宝写経の所蔵寺社ま
で、繊細な文で綴る、古寺案内

17



現代の道しるべ



13

真言密教への誘い
西宮 紘

11

藍の生葉染め第一回

子どもと楽しむ



日本のこころと形

七夕 星に願い

川に流す



輝く宇宙を顯す万灯万華大法要

東京 満願寺

撮影 吉村正治

PHOTO&TEXT SHU FUJIWARA

夏、元気いっぱいの笹竹に
色とりどりの短冊を飾ります
願いごとを一つ一つ書いて
そして天空の
ひこ星と織姫が
会えることも祈ります
次の日、飾り付けた笹竹は
そのまま川に流します
旧暦の七月七日は西暦八月九日
夏の空が一番透き通るところです

*環境問題もあり流せない川も多くなりましたが、流せれば願いごとと笹の一部を流しましょう。



世田谷区 岡本民家園の七夕とほたる祭り

地元の有志の人たちの創意と工夫で楽しくなつかしい
籠に乗りたり 折り紙を習ったり子どもたちも大喜び
今年は七月五日（土）

岡本民家園では 提 義久氏がほたるを育てている
自生のほたるが見られる

住所 東京都世田谷区岡本 2-19-1

電話 03-3709-6959

書聖空海の魅力 飯島太千雄

弘法大師最初の著作『聾瞽指帰』まだ無名のころの書が今に伝えられているだけでも大変なことです。大学を出て都での榮達を期待していた一族に対してこの書は、大學を中退して仏教を志すことを高らかに宣言した人生選択の書です。「儒教にも道教にも人間の内面にもつ世界は見ることも聞くことができない、仏教の中にその眞実の宇宙が説かれている。」仏教を選んだ意氣と力強さのみなぎる書です。



『聾瞽指帰』 卷末部分

初めてこの書を見たときの感動が忘れられません。圧倒されるような力強さとみなぎる霸気のようなものに。ご専門の立場からはどういうところに魅力が有るのでしょうか。

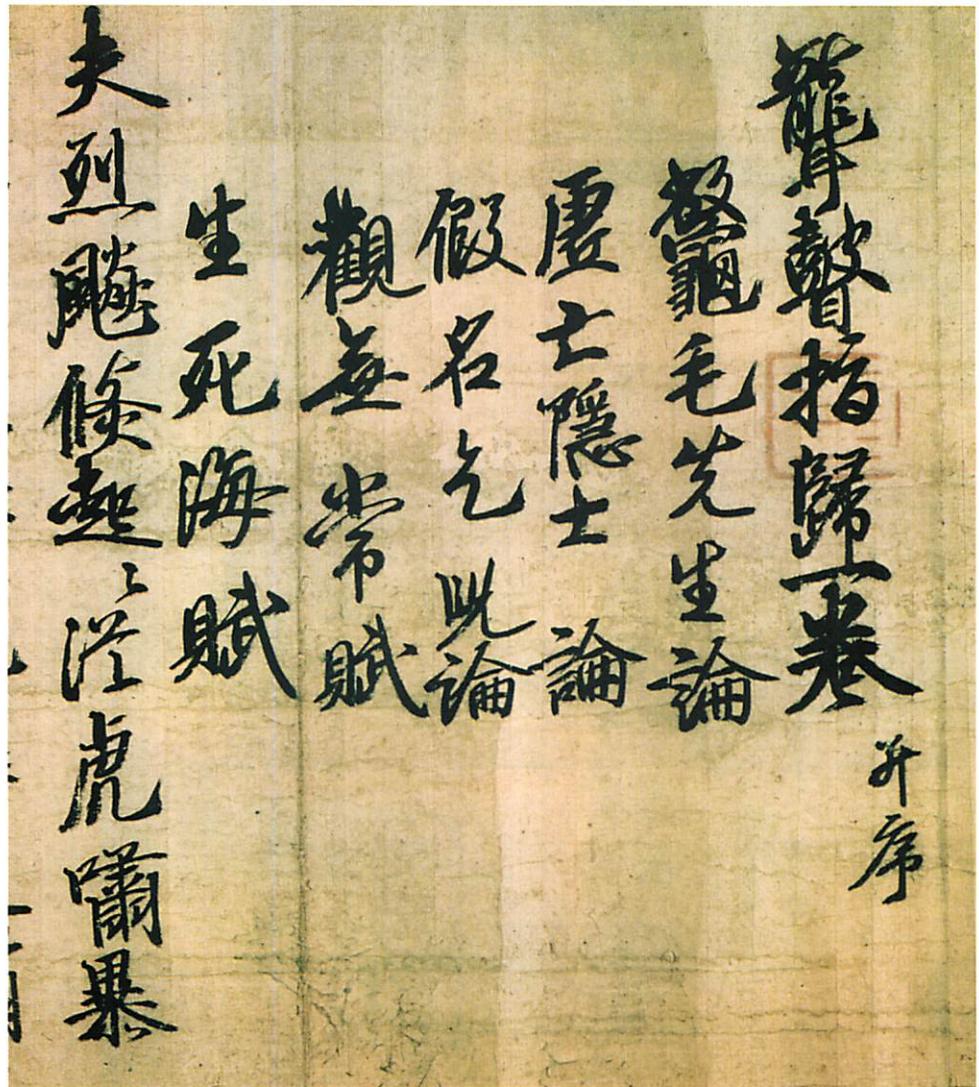
そうですね。この書は後に空海自身によって「三教指帰」と改められましたが、「聾瞽」といういかにも刺激的な字を用いたところに、青年空海の一途な血氣、四圍の認識不足への心の昂まりがよく表われています。

「聾瞽指帰」は、全長二十一メートルにも達する長大な一巻でそこに中国の東晋時代の書聖、王羲之の書法をよく学びとった行書で書かれていますが、その若者の書とは思えない完成度の高さに驚かされます。技術的には、既に古今の日本の書を通じて、第一級の水準に達してしまっているのですから。

しかし、それ程秀れた書であるのに、私はこの数紙を見続けるだけで、とても疲れます。普通、こうした典籍は、同じ書風、書式でそれこそ一本調子に書くべきなのですが、「聾瞽指帰」では、時に草書や連綿を交えたり、字詰を七字から十四字と変えて、大小、疎密の変化をしきりと行っています。それなのに疲れるのです。

それは、この筆者の「剣氣」のようなものが、私の心に刺さるからです。本書を執筆する筆者の手さばきは、陰に陽に、円転自在、まるで剣舞のように美しく、見事であるに違いありません。しかし、その刃の切っ先は、常に観者に向けられている。だからです。筆技を尽し、変化し、遊んでいるようで、筆者の心は凝縮されて、一点一画に張りついている。その緊張と心のゆとりのなさが、一字一字の懐の狭さ、点画のせめぎ合い、そして激しい筆勢になつていているのです。

二十四歳まだ無名のころ、書表現を完成していた。この後三十一歳までは消息がわからない



弘法大師 『龕贊指歸』 卷頭 高野山 金剛峯寺

撮影 飯島太千雄

飯島太千雄

1942年東京生まれ

弘法大師書道研究の

第一人者

自ら撮影した

灌頂記のクローズアップは

書道研究に新たな

地平を開いた

主著

弘法大師書蹟大成

王羲之書蹟大系

空海大字林

顏真卿大字典

良寛墨蹟大觀など多数

「贊」の一筆目が、鳥の形となっています。
これは、鳥書。

「贊」の一筆、獸の爪のような形ですが、これは龍爪。

鳥書、龍爪は、雑体書と呼ぶ造形的な特殊な書体です。渡唐した空海は、長安でこうした雑体書の資料を集め、それを混交、書の曼陀羅を創造します。つまり書で密教の表現に成功するのです。「龕贊指歸」には、主人公、つまり若き空海が虚空藏求聞持法の成就への苦闘の姿は描かれてはいますが、密教の思想は出ていないと言われています。しかし、「贊」「贊」の一筆には、既にその萌芽を認めることができますし、その表現主義的な全体の構成 자체が、後に表現力に溢れた密教を大成する空海をよく表しています。「龕贊指歸」の書は、まさに若き空海、その人なのであります。

吉岡幸雄に聞く

日本の伝統色

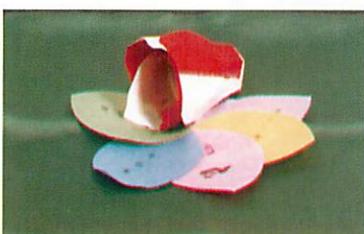


吉岡先生は京都に五代続く染色の家に生まれ、今は草木染によって日本の伝統色を復元されている。また東大寺のお水取りに飾られる、紅花で染めた美しい椿の造花を毎年奉納されている。日本の伝統色についてお聞かせ下さい。

日本には飛鳥の聖徳太子の頃から千二百年培ってきた日本人の色があります。それが化学染料によつてなくなつてしまつたんです。このわずか百年なんですが。近代化によつてね。でも今あらゆるところが壁に当たつていますね。医学でも建築でも、人間の知恵が勝つだろうと思つていたところが、そうじゃなくて、やはり人間は自然との共存というか自然の一員であることが解つてきたわけですね。ではその伝統色はどこへいってしまったのかということから始まるわけです。

日本の伝統色を拝見するととても色が鮮やかですね。光が布を透き通つてくる。とくに裏かさねは綺麗ですね。しかも優しい。

日本人の色に対する考えは二つの大きな流れが有ります。ひとつは侘び寂、鎌倉期、禅宗の渡来からです。もうひとつはそれ以前の絢爛な色の時代です。絢爛豪華な色を好むのは世界共通です。日本には中国から染色の技術が入つてきましたが、この技術も世界共通です。アンデスのペルーも十五、六世紀まで我々は知らなかつた国です。そこの染色を見ても色の出しお方はほぼ同じです。材料もほぼ同じです、自然界にあるものですから。



では日本の伝統色とか、日本ならではの色の名前多

さはどこから来るのでしょうか。

僕はいつも基本はひらがなの発明と和歌だと思つんで
す。

和歌を詠むということは季節感を問うということです
ね。ひらがなは女性の発明だといいますね。女性も男性
も非常に教養高く和歌を詠む。和歌を詠んで文を交換
する。

今朝起きたらこの石榴を見てだんだん色付いてきたな
とか、紅葉が昨日までの黄色が今日は紅くなつたとか
思わなければいけない。移り変わる自然をいかによく
観じ感じるか、感じられなければ歌が詠めないわけで
す。自然にたいする觀察力の強さというものからいい
歌が詠めるようになる。その自然の移り変わる色を名
前にして、自分たちの衣装を着ます。なごみの衣装というこ
とです。平安朝の人はたくさん重ねます。源氏物語絵巻
を見るとよく解りますが、今の友禅のように、もみじの
時にもみじの葉が描いてあつたり、菊の花が描いてあ
るということはないんです。

色、それに近い色を着ることによって秋は菊と呼び、
春は桜になりまた山吹になる。つまり形がないんだけ
れど、色になぞらえ、四季の花なり、四季の自然になぞ
らえ、またなりきる。それによつて日本人はたくさんの
色の名前を持ちます。ですから桜と言つても、桜で染め
ているんじゃないんです。





これは紅花で染めたものです。濃い赤にもう一枚薄いすずし絹を掛ける。と上の布が透明になつて下の赤を拾うから桜色になつてこれを桜色と呼ぶ。あるいは緑と紫を組み合わせたらかきつばただと。紫はかきつばたの花で、緑は葉や茎です。もみじになつたら黄色から赤にグラデーションする。自然の現象をうまく捉え、花の名前を借りて色を表せる。

それはこの色感の微妙に移り変わる日本列島だからこそできたり、多くの色名も生まれたと思います。日本人は四季の景勝、景観に敏感でそれになぞらえる色の名前を付けた。ここに日本人の色があります。

現代人はその季節感を喪失しています。

旧暦から新暦になつたことが一つです東大寺のお水取りの時は三月なのに雪が降る、そういうえば旧暦の二月なんだな。そして建物。空調設備が発達しすぎると季節感を失います。人間は手でも足でも使わないものは衰えます。これだけ冷暖房が効くと皮膚感覚が感じられない。五感が失われてきているわけです。もう一つは日本人が行事を失いました。五節句。二十四節。七十二候。中国でできた言葉ですけど、この日本列島に住んでいる日本人が一番敏感です。一年を七十二で割ると五日位でしょ。一年が五日ごとに変わっていくその自然を尊ぶ。観察する力があるということが一番豊かに暮らせるし賢くなれると思います。学校に行くとか、一生懸命会社で働くとか、お金をいっぱい儲けるとかよりね。

千二百年続く 東大寺のお水取り 吉岡先生の染められた紙が修二会に参籠する練行衆の手で
紅白のつぼみの形の椿に生まれ変わり 供えられる 二週間のお水取りが結願するときその椿も花開く

重陽の節句も今はほとんど知らないし行われていないです。

九月九日ですね。旧暦ですね。菊のはなに綿を幾重にも重ねていく。一晩おいて次の朝その綿に移った菊の香りと菊の精を頂いて顔につけたりします。女性は綺麗になれますね。自分たちのまわりにある生物にたいする尊厳。そんな潤いが欠けています。

それを取り戻すには。

ぼくはお祭りとか行事とかを一生懸命見に行きます。東大寺のお水取り。春日大社の御祭り。石清水の放生会。染色の仕事はよけいに自然を感じやすいですが。夏は藍、冬は紅花、そこに歳時記があります、おのずから。

ではこれから夢はなんですか。奈良や平安朝の染色の職人に追いつきました。

昔あつた植物がないとか、技術が伝わって無いとかという差が有りますか。

それは無いですね。正倉院文書にも染色の事が書いてあります。正倉院には薬物も残っています。その漢方薬と染色の材料は共通項なので何を使つたかは解るわけです。



では色の復元には何も難しいことは無いわけですね。

それが難しいんだな。つまり我々が正倉院の展覧会に行くでしょ。あおの宝物の中に真っ赤な布がある。何でこんなになるのか、と思うようなものがいくつかあります。つまりある程度まではいけるんです。しかし

もつと鮮烈に、もつと濃くというとなかなかいけない。しかも千年間、色が鮮やかに生きている。

色が褪せずに。

奈良や平安朝の色彩、桃山時代の辻が花とか秀吉が着ていた陣羽織とか、輸入のものを含めてね。ただ材料がね、大地が弱っているつてよく言うんだけど、同じ紅花でも千年前の紅花と、今の紅花では、今の方が弱いです。

大地が弱っているいるんですね。

昔あつた植物がないとか、技術が伝わって無いとかという差が有りますか。

くなればもっと良いものが出来ると思う面もあります。そのせいにばかりしてはいけませんけど。

だからやはり奈良、平安から落ちてきています。桃山時代に一時期がんばりますが、それ以降職人の技は落ちていて思いますが、それほど施政者が金持つで無くなつたとか、職人が技を競わなくなつた事もありますね。

では色の復元には何も難しいことは無いわけですね。

お寺さんでも散華を自然な色で染めたものを使うとかね、袈裟や衣も奈良のお寺は奈良時代の物に、平安の真言等は平安時代の色の物にすると良いですね。

その方が美しいでしょ。

職人の技を残して欲しいですね。

京都宇治の工房に伺つた。染色は染め上がつた優しく美しい色から想像も出来ない厳しい作業です。

しかし工房に入ったとたん、お芋のふけの甘い香りと、京都ならではの美味しいお料理に心奪われ、工房の写真はほとんど撮れませんでした。

なお吉岡先生は『日本の伝統色』を紫紅社より刊行。

微妙の色を再現するため、実際に染めた布で美しい裏表が見られます。



PHOTO&TEXT SHU FUJIWARA

子どもと楽しむ藍の生葉染め

なまはぞめ



美しく染まった絹のスカーフ

上と左項の写真 吉岡幸雄 『自然の色を染めるより』
紫紅社

家庭でできる草木染が写真入りで詳しく
紹介されています



藍の葉を机の上に置きます

その上に布をおいて

木槌でとんとんたたきます

葉の置き方で楽しい作品ができます



PHOTO & TEXT SHU FUJIWARA



三 水に浸します

二 藍の葉を手で細かく
ちぎります

夏の日差しを一杯に浴びた
藍の葉を摘みます



六 しつかり絞ります

五 もみおわったら 布袋でこします

四 たらいかバケツに入れ
よくもみます

この液のなかに好きな布を
入れて染め上げます

太陽に干すと美しい
藍染めが完成です

指先やツメがしばらく藍色に
なりますが 二三日でとれます

真言密教への誘い

西宮 紘 日本精神文化史研究者

神護寺の薬師如来は、私に一種の啓示を与えてくれたのだ。何故なら、物理学の相互作用は結局のところ多体問題をどういう視点からアプローチするかにかかっていると考えていたからだ。ところが、この如来様がおられる神護寺の前身高雄山寺にはかつて大師様が止住されており、真言密教における日本で最初の灌頂が行われた寺でもあり、その真言密教では多数の仏様や菩薩達が不思議な法則に基づいて曼荼羅としてまとめて上げられているのだ。ひょっとしたら、空海という人はすでに多体問題を解決してしまっているのではないだろうか。



写真提供 彫刻家 菅原安男 大塔胎蔵曼荼羅諸尊

薬師如来信仰が奈良朝時代以来度重なる天然痘の流行と無関係ではないように、確かに薬師は医療、観音は船難など、それぞれの仏様や菩薩様は専門の救済分野を持っておられる。他方で、それぞれの仏菩薩は例え一尊であってもあらゆる分野の悩みから人々を救うことができると言われる。ひるがえつてみると東洋という世界は多神教が盛んな世界であるとよく言われるが、この多神教を受け入れる人々の心は一体どのようなものなのか。ただ単に、ある時ある場での現世利益を得るためにものでもあるま



西宮 紘（にしのみや こう）

インドエローラの石仏

PHOTO TACHIBANA MANGETSU

1941年2月17日生まれ

1969年 京都大学 理学部物理学科卒業

『空海一火輪の時空』 1984年 朝日出版

『縄文の地靈』 1992年 工作舎

『鬼神の世紀』 1993年 工作舎

現在、藤原書店から出版予定の「時空論」(仮題)
誕の問題から量子力学・相対性理論、宇宙論、
進化論、分子生物学、仏教等幅広い分野を時空
とその破れという観点から執筆中。



そこには何か深遠な秘密が隠されているのではないか。このいわゆる一即多、多即一を明確に図画化しているはずなのが真言密教における曼荼羅であるに違ないと考えた。だが、それらの曼荼羅をいくら眺めても、更には、それらについての解説をいくら読んでみても何も分からぬのである。これは一つ、その源である空海という人物の著書にあたつてそこで彼が何をどのように考えていたのかを知らねばならないということになつた。しかし、私が挑戦した「秘密曼荼羅十住心論」は実に難解な代物であったのだ。素人の私にはまるで歯が立たない。ひとまずは放棄せざるを得なかつた。

だが、意外な転機が、再度、私の目を真言密教に向けることとなつた。

現代の道しるべ

転法輪

「小学三年生が見つけた三千前年の生命の花
大賀ハスとの出会い」



PHOTO SHU FUJIWARA



初めて咲いた大賀蓮



大賀一郎博士

蓮の研究家大賀一郎博士が、満洲にいたとき、蓮の実を持ってきた土地の人から、蓮の実は三百年、千年のものが芽を出すことを聞いた。博士は、日本に帰つてから、このことを実証したいと思っていた。

そして、いつか見た丸木舟に、洗い落とされたいくつもの蓮の実の痕のあつたのを思い出した。

大賀ハスの開花の記事を見た朝、私が特に心を打たれたのは、二千年の生命を保ち続けたものが、蓮

し、この丸木舟の出土した弥生時代の土層を発掘することを思い立つた。昭和二十五年の秋、ほとんど不可能と思われたこの発掘計画は、次々に人々の心を動かし、多くの人々が協力して、昭和二十六年の三月一日から千葉市の検見川小学校の運動場の発掘が始まった。しかし、掘つても掘つても蓮の実は出ず「もうやめにしましょう」という声に「やめてはいかぬ」と博士。その博士もあきらめようとすると人々が励まし、ちょうど一ヶ月後の三月三十一日「先生これですか」と小学三年生の西野真理子さんが、一粒の実を差し出しました。この実を丹精こめて遂に開花させたのが大賀ハスです。

* 大賀博士が年代を少な目に発表したので新聞上で二千年前となっているが、炭素測定の結果三千年前であることが後に判明した



弘法大師の詩

如泡の喻を詠ず

天雨濛濛(もうもう)として天上より来たる
水泡種種にして水中に開く
たちまちに生じたちまちに滅して
水の本性を離れず
自らの業(ごう)によつて生じまた滅す
悟りの境界(きょうがい)は不思議なれども
心仏がこれをなす疑うことなけれ
宇宙万有は我が心にあり
本より如来と不二(ふに)なり
この真理を知らざれば哀れむべし

水は雨になり天上から降り川になり海になりまた雲になり
その姿をさまざまにかえても 同じ水に変わりません
水中の泡も生まれては消え 消えでは生まれます
霧のちいさな一粒も 水泡も水という宇宙から離れる
ことはありません その一粒一粒が宇宙をつくり
また全宇宙が霧の 水泡の一粒の中にあります

新刊紹介

写経の古寺巡礼 乾侑美子著 N H K 出版 1600 円



時空を超えた静かな流れの中を一晩旅してきたような気持ちで本を置いた。乾氏の優しい、清流のような感性と、それを持って「写経」と向かい合い、織りなしてこられた世界は、私の中に心地よく入り、響き、新しい何かを目覚めさせてくれる。

豊かな感性の合間に、写経の歴史的、技術的な知識がとても自然にちりばめられていて、それが知識の羅列にとどまらず、読者の世界を広げる役割を果たしている。それは、乾氏の中で、その歴史的事実との「出会い」がしっかりあるからであろう。一つ一つを全身で受けとめ、心が動き、時を超えて自分自身の生身の経験として意味を創り出していく。その「出会い」の瞬間の喜びが、暖かい文章とともに読み手である私に伝わってきて、今までの私自身の「写経」の経験から得たのとは別の「世界」を、ともに味わい、ともに心踊らせることができた。乾氏は、何かを願うために写経をするというより、「写経」を通して、様々なことや「時」との「出会い」を楽しんでいられるのかも知れない。もちろん、仏への祈りが基盤にあることは言うまでもないが。

「写経」という一つの行為を通して、こんなにも豊かな世界を持てるのだということを教えていただいたことは、それは同時に、読者の癒しとも、希望ともなるのではないだろうか。各寺院の描写も素晴らしい。いつか私もこんな写経の旅に出て、私自身の世界を織りなしてみたいものだ 箕浦智子

ボロブドウル遺跡のレリーフに見るシャカムニの生涯

溝口史郎 丸善 1500 円

医学の援助のためインドネシアを訪れている著者が出会った仏教遺跡ボロブドウル。そのレリーフは千数百あるが、仏伝、華厳經やブッダの前世の物語ジャータカなどが描かれている。ブッダの生涯が描かれた仏伝は百二十面。『Le Lalita Vistara』を原典とするこのレリーフの美しさに魅せられた著者が、ここに見事に解説。ブッダの生涯を写真入りでいきいきと描き出す。なお

『Le Lalita Vistara』漢訳名『方広大莊嚴經』を訳した『ブッダの境涯』も東方出版より刊行された。6000 円

著者は神戸大学医学部教授を経て現在は
神戸森学園理事長





福岡正信の自然農法実験開始

創刊号で特集しました、福岡先生の自然農

法。水もやらず、肥料もやらず、雑草もとらない。夢のような農法です。インドやアフリカで大成功し、アジアのノーベル賞、マグサイサイ賞を受賞された福岡先生の自然農法を東京で始めました。必要なものは土と種と小さなコンクリートミキサーだけです。このミキサーで様々な種と、その土地の土を混ぜます。ちいさな土団子が出来ますから、それを蒔くだけです。赤土の方が土団子がつくりやすと思いますが、実験する土地は黒土ですので、団子が大きくなりがちです。はじめは土壤をよくするため、クローバーの種を二三年続けて蒔きます。黒土は土壤がよいので、大根などいくつかの種も混ぜました。クローバーの種を十キロ、大根の種を三キロで団子をつくりました。これだけで蒔ける面積はごくわずかですが、十年、二十年の長期計画で少しづつ面積を増やしていきます。



読者の皆様へたくさんのお便りをいただきました。

「畑でとれた藍の種を送ります。白花小上粉という藍染には最適の品種です」 栃木K. R

藍は順調に育っています夏が楽しみです、有り難うございました。

「創刊号の特集が福岡先生の特集は、我が意を得たりです。今後が楽しみです。」 東京O. M

「季節感溢れる紙面づくりに感激です」 神奈川S. I

「紙面全体にゆったりとした時間が流れているようです。」 仙台 S. D

「ツリーフリーペーパーは素晴らしいですね。どこで買えますか」 東京M. M

日本リサイクル市民の会事務局へお問い合わせ下さい 03-5228-3331 近々特集で紹介します。

「福岡さんの特集で今後を期待しないわけにはいきません」 和歌山M. Y

紙面の都合上一部のみ掲載させて頂きました。心より御礼申し上げます。

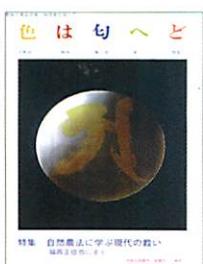
バックナンバーも僅かではありますお申し込み下さい

EDITORS ADDRESS ryuju835@ra2.so-net.or.jp

インターネットホームページが開きました

www02.so-net.or.jp/~kukai168/

ご要望の多かった色は匂へど専用バインダーも準備中です



このページを編集中にチェスの世界一とスーパーコンピューターの対戦のニュースが入ってきました。名人が初戦を勝利です。前回の対戦でも名人が三勝一敗で勝利です。名人曰く「コンピューターは目先の手にとらわれてるね」

やはり全体を読む力、流れを感じる力はまだまだ人間の経験と感性が強いようです。もちろんそれは脳の中だけの問題ではありません。

心と生命の全体性の問題です。死も脳の中だけで考えられるのでしょうか。

脳死の問題は別冊特集号を準備中です。

ミキサーは小型の方が使いやすい



夏露草 (NATSU TSUYU KUSA)

PHOTO SHU FUJIWARA

この本はツリーフリーペーパーで作られています
さとうきびから砂糖を取り出したあの 残った繊維から作られています

次号予告 九月一日発行
特集 岡野守也が語る二十一世紀の宗教と地球
宗教上の紛争が世界中で起こる今日
日本には世界の宗教を大きく包み込む 教えがある

Editor RYUJU ABE Art Director and Photographer/SHU FUJIWARA Special Contributors/RYUICHI ABE KO FUJIWARA RYUICHI SATO
Editorial Staff/MIWA SAMURO TOMOKO MINOURA SEIRYU SATO KOJI TOKUMARU EISHIN TAKAHASI REIKO SUDO KAZUFUMI MOTOYAMA
HOMEPAGE DESIGN MASAAKI OKA HIROYUKI HANAWA Making Mechanic SANMITUSHA Printing KORINKAKU
PUBLISHER RYUBUN ABE EDITOR RYUJU ABE EDITORIAL OFFICE MANGANJI SHUGEISHUCHIN S.H.C

〒158 東京都世田谷区等々力3-15-1 電話 03-3705-1622 ファクシミリ 03-3703-4979

Shingon Horonic Irowanioedo 第一巻第三号 平成九年六月一日発行